

大阪府におけるシカ・イノシシの現状

—近年の大きな変化を中心に—

文・写真　幸田 良介（大阪府立環境農林水産総合研究所生物多様性センター）

はじめに

シカやイノシシなどの野生鳥獣による被害は、1990年頃に顕在化して以降、全国的に未だ深刻な状況が継続している。大阪府でも農業被害や生態系被害が多発していることから、昨年度末にシカとイノシシの管理計画が刷新され、新たな対策が開始されたところである。そこで、計画改定に向けて取りまとめたシカやイノシシの生息状況について、近年の大きな変化を中心紹介したい。

北摂地域における シカ生息密度分布の変化

まずはシカの主な生息地である北摂地域でのシカ生息密度とその分布状況の変化である。当研究所では2014年以降、大阪自然環境保全協会の皆様にもご協力いただきながら、約100ヶ所の調査地にて糞塊除去法を用いたシカ生息密度推定を毎年実施している。その結果、平均密度や推定頭数は大きく変わっていないものの、シカ生息密度分布が大きく変化していることが明らかになった（図-1）。

変化の1つは、捕獲圧の変化に伴うと思われるシカ高密度地域の移動である。例えば、箕面市周辺では箕面国有林を中心に高密度でシカが分布していたが、2014年度末に国有林での捕獲が開始されると、国有林内のシカ生息密度は大きく減少した。その一方で、遠方に高密度地域が突如として出現し始めた。このことから、急激な捕獲圧の増

加にともなって一部のシカが移動した可能性が考えられる。

もう1つは、これまでの低密度地域での変化である。例えば、豊能町東部から茨木市北部にかけての地域や茨木市南部には、以前はほとんどシカが生息しておらず、アオキなどのシカの嗜好性が高い樹種にも食痕がみられなかった。しかしながら、ここ数年の間にシカの糞が確認されるようになり、林床植生への食痕も目立つようになってきている。これらの分布拡大地域や新たな高密度地域を中心に対策を強化していくことが重要である。

南部地域におけるシカの侵入・定着

北摂地域でのシカ問題に加えて、近年大きな課題になりつつあるのが南部でのシカの侵入・定着である。これまでも単発的なシカの目撃・捕獲事例は見られたものの、ここ数年でその頻度が急激に増加している。実際に、目撃事例の多い河内長野市に自動撮影カメラ5台を設置したこと、この1年間の間に全てのカメラでシカが撮影された（図-2）。うち1台では定着性が高いとされるメスジカや仔ジカも撮影されており、もはや定着・分布拡大は確実な状況となっている。南部でのシカの侵入・定着は、当該地域の行政にも住民にもほとんど想定すらされておらず、対策も全く行われていない。侵入・定着状況のモニタリング体制を整えるとともに、現状の情報発信や必要な対策手法等の普及啓発を早急に進めていく必要がある。

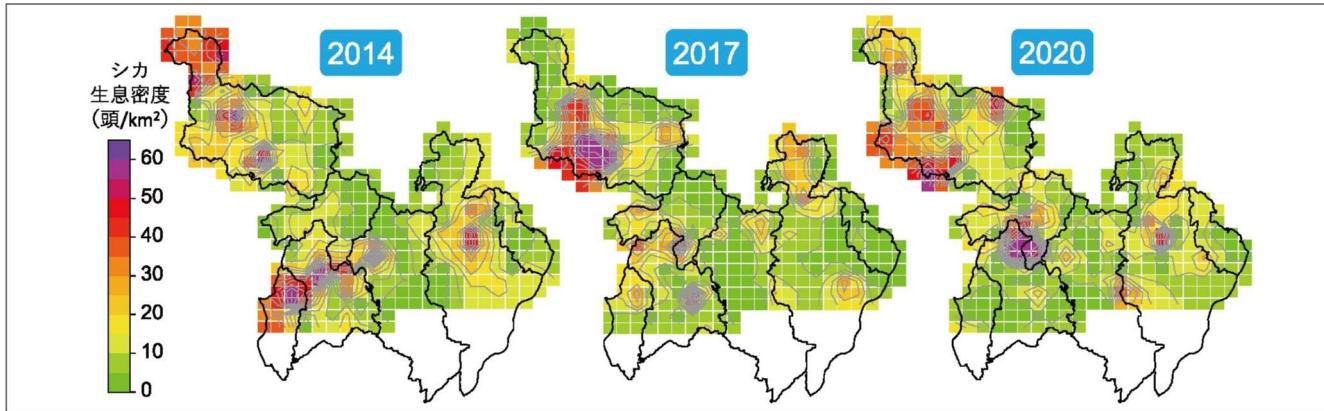


図-1 大阪府北摂地域でのシカ生息密度分布とその変化



図-2 河内長野市に設置した自動撮影カメラで確認されたオスジカ(上)及びメスジカと仔ジカ(下)

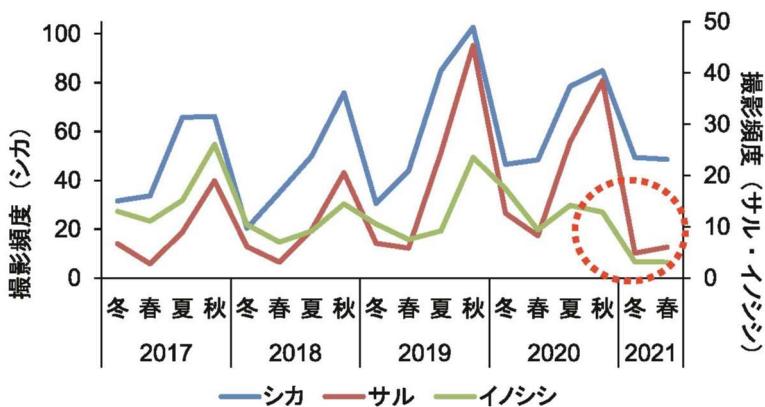


図-3 箕面の森におけるシカ、サル、イノシシの撮影頻度(頭/100カメラ日)の変化

豚熱によるイノシシの減少

イノシシは既に府内全域の森林に生息しており、生息密度も概ねほぼ一定で推移するなど、これまでシカで見られたような顕著な変化は少なかった。しかし2020年秋にイノシシの豚熱感染が確認されて以降、その生息状況は急激に変化している。

図-3に、箕面の森に設置した自動撮影カメラでの、シカ、サル、イノシシの撮影頻度の変化を示す。ここで撮影頻度とは、100カメラ日あたりの撮影個体数で、生息密度や利用密度の指標として用いられる値である。毎年秋にピークを迎え冬から春にかけて減少するという変動が共通して見られていたが、2020年の秋以降は様子が異なっており、イノシシのみ通常の秋の

ピークがみられず、その後の冬・春の撮影頻度も過去最低水準に落ち込んでいた。実は時を同じくして、隣接する茨木市で、大阪府で初めてイノシシの豚熱感染が確認されていたのである。

豚熱はブタやイノシシが感染する熱性伝染病で、強い伝染力と高い致死率が特徴である。そのため豚熱の蔓延によりイノシシが激減し、撮影頻度が低下したものと考えられる。その後府内では2021年春に泉州で、2021年秋には中部でも豚熱感染が確認され、今はや全域に感染が広がっている。中部の東大阪市に設置した自動撮影カメラでも、2021年秋になって初めてイノシシ撮影頻度が急減しており、やはり豚熱によって府内全域でイノシシ

が激減していることが示唆される。一方で、豚熱が最初に発生した岐阜県では既にイノシシ生息数が回復に転じているという情報もあり、生息数の減少は短期的なものである可能性も考えられる。豚熱によるイノシシの激減に安堵することなく、被害対策を継続していく必要があると言えよう。

おわりに

以上のように、大阪府のような狭い地域においてもシカやイノシシの生息状況は絶えず変化しており、それに応じて被害状況も刻一刻と変化している。これからもデータに基づく順応的な管理を進められるよう、継続的なモニタリングと対策手法の立案を進めていきたいと考えている。